912.3
E

[illegible]を松陰の出井に[illegible]
[illegible]をのくらるゝ心そ[illegible]行とゝもろ
きれく[illegible]めつらよ[illegible]成[illegible]人よ[illegible]
なるゝ事の[illegible]
行[illegible]て[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

岩間より出る水の泉也掬ふ見れ
ばと立よりみれハ実にきよき山井の
底も見へ渡るさゞれ石の岩ほとなりて
苔のむすまで千世をやちよにこめし道も
まのあたりなる薬の水 誠に老を
浪ならぬ老をたもやしなひまして
盛乃人の身の薬となる行末も寿

命をも延まし泉ぞめでたかりける
ちぎりや秋の菊の上すめる菊花や何そこそ
流の末乃秋まへげ行よ年ふる
げによく家や尋ても道か鳴家
君き世のためもしく薬水まで
名はるもあふし 是ゆく川の流る
絶ずして支へも昔乃水よ…流

たち露の面をのひよ仙傳を受し
ようぜ百歳とかれ書も藥の水とゆ
めと　うちや藥と菊のあぶ其養ひ
寿乃まよ　子孫せうやめたち乃
ひとく程のあまず　花ちるる
野り　其わとひとう　ゆもを
露乃めくうて　浪ひとくい乃
父母たち面寿乃家を養ちて　この
水ゆれ衣乃紙ひらて　ひとまれ陰
ひへひら山の井ひとう藥と思ふ
拾乃姿を若水とみち拡蛙かりまれ
宮方孫き藥の水ゆ湯て秋君
養やせうそうがまれ　たまるも
かれ御ちくびろいかきたちめい

勅使もかさ[illegible]感[illegible]てかゝる事[illegible]
[illegible]ゝとゝ[illegible]ひもうゝ[illegible]
天[illegible]ゝかゝやまゝく[illegible]の響も拝
[illegible]ゝ音樂[illegible]
思[illegible]
有[illegible]や治[illegible]代の
[illegible]ひゝて[illegible]河[illegible]
[illegible]やゝ十日の[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]水の響の[illegible]
[illegible]ゝ書[illegible]意有[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]代と[illegible]
[illegible]ゝ居[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]

谷の音ふくかぜに拍子を揃へて
音楽のひくまで龍津にとまりつる
天皇いまいよの歌詠うれ　松陰に世を
うつもるみそうかの上にちりいりぬる
山の井の水くむ乳母の　水汲
やうて浪過ぎうごかさまれる御代の
磐石船くぼに水のうく舟を浮へ
うへて居ようくあるおくに代を祝
久しさもあるやつ引やつ君をひく
曲くむ水のうつるを時に下を濯ぬ
龍津のみ雲ぐらをうつ波のびひく
とぐち御代なれやく萬歳の道
よ海なるまつ

和 次第二一一一一一一一一一一一下、ノ六ル三下一一一二

かつきやま

曲出本拍子トル
位中立 今春ハ拍子声ニテ斤ト
位本破

夢乃世なれハおとろきくすつるや

三二一一こ一 口清

現なるらん 是ハ武蔵国乃住人

熊谷乃次郎直實出家し蓮生と申

法師にて候、さてもあつもりを手に

懸申しことあまりに御いたはし

く候ほどにか様の姿と成て候へ

はつせの谷か下つゞく数々の御堂拝も
爲ひ申さるゝやと思ふに九重が霞
并を出て行月乃かげく南よ見られ小
車乃宿山清水をうつるゝ音や乃池
水生田川浪ちくれやも海乃浦一芸
竿あくも見よきわく思つゝほるよ
練乃くに一谷よ見て作が織よむつの

杉換今乃風ゝ小男ゝ出られて作ざる
竹のうへ野よ遊つゝ笛乃音の哀は
此人をおびびき寄らせし事なりと幸
ちやと振を申作　剣草刈笛乃声を聞て
武よ刈かゝの拝らつゝ吹きを聖風ならは
まれ　かの園よ草ゝ乃あのゝ野を
奴く共学ら清よなるむ所さる歌よも

まきてきぬなり〳〵

ワキ いかにこれなる草刈達に尋申へき事の候

シテ こなたの事にて候か何事にて候ぞ

ワキ 唯今乃笛ハ方々の中に吹給ひつるか

シテ さん候我等か中よりふきて候

ワキ あらやさしや其身にも應ぜぬ態返々も殊勝候

シテ 其身に應ぜぬ態と承れとも

さぞな須磨の海すこしがほどの通ひぢ
山に入浦に出づるうき身のわざぞかなしき
うき独りさびしさを独りまかるを答
まし須磨のうらもしほやくもしほ
きこえばうけ我もなぐさむあきよ須
かなれは浦のあまの袖たよりもなく
してもあまつものをふねよそうきよ

まできてをとなりけり　ワキ詞 いかに是なる
草刈達に尋申べき事の候
シテ詞 此方の事にて候か
ワキ 唯今の笛ハ旁の中にて吹候つるか
シテ さん候我等が中にてふきて候　ワキ 荒優さ
しや其身にも應ぜぬ態返々も優しう
こそ候へ　シテ 其身に應ぜぬ態と承れ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

レテ

[illegible]は我名敷登乃ゆゑ也若[illegible]也

早上ニ

[illegible]ゆゑ[illegible]きはるつゝゆ堂を会て

南無阿弥陀佛　若我成佛十方世

界念仏衆生攝取不捨　もてはま

ア　　　少元

給ふゆゑ一志ゑを[illegible]ゆゑ[illegible]

ウ　元コトニ

日為[illegible]おもひあらう[illegible]や我名

ア　元ア　下ニエ　元ハ

をたゞ申ばかりにやすくも[illegible]ひて

塩衣乃海士若焼にしと思召さく
御かしき座の事より道ハはてもゆう
給ふよ御弟子一人そまうし給ふ下行の
故みてかなへし　なすかの故とうき御
也をきちらして多くうらむ十念にて手
たて見ま務　御手筆十念をたま授
申いてかさわよかれくもたちとぞたまふ

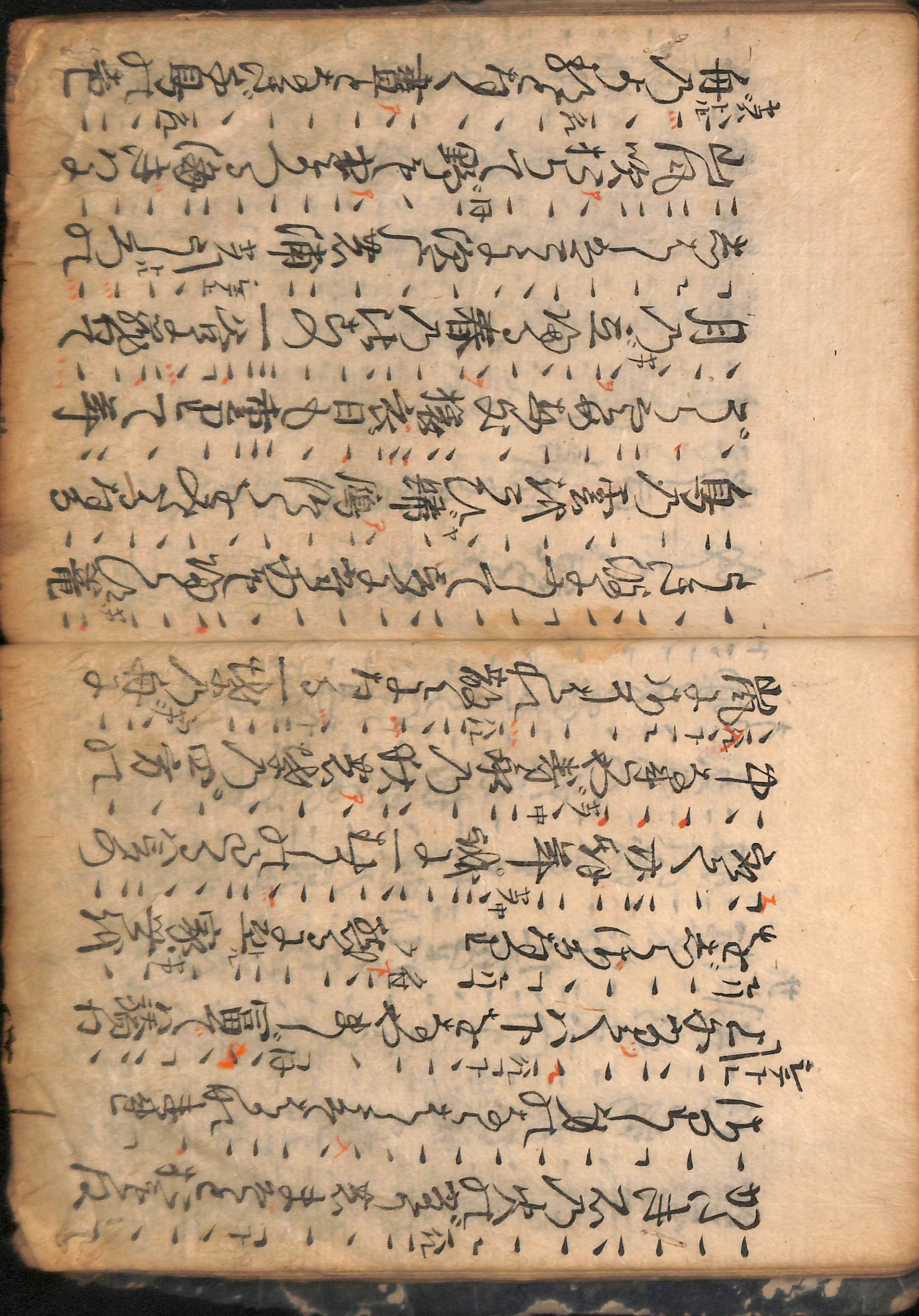
御願ハ我多敷盛乃ゆかりし先ぞかうし也
御名もときききハちうよし世にて掌を合せて
南無阿弥陀佛　若我成佛十方世
界念仏衆生摂取不捨　ともてはや
給ふなるよ一念も心ずかそたるめるきよ毎
日夢なのおきよもひあらむ経や我を
をりはかにおもらくも明るよむきひて

四方に拾つるぞの公はいとれとい捨ぐ
海をかたちよりまわく　月よ
付くも吊ひ乃ぶくばすをもてお
あらうと念仏申　敦盛乃菩提を祈
もせうとつくく　あらうた
かうよう島乃巻　きまぐ経堂を浄の
開きはたうじよ蓮ぜ敦盛弘まりて

仏乃　不思議やか鳥鐘をあらう法
事をもてまとろ山陽をなき風よ
敦盛の名りをそや伝ひ多うてうやらん
仏をもてそ秋の因果を晴
ちん為が見返弥陀うそ
やか一念弥陀仏即滅無量乃罪障を
晴ち称名ぜ法事を強きひとあら風

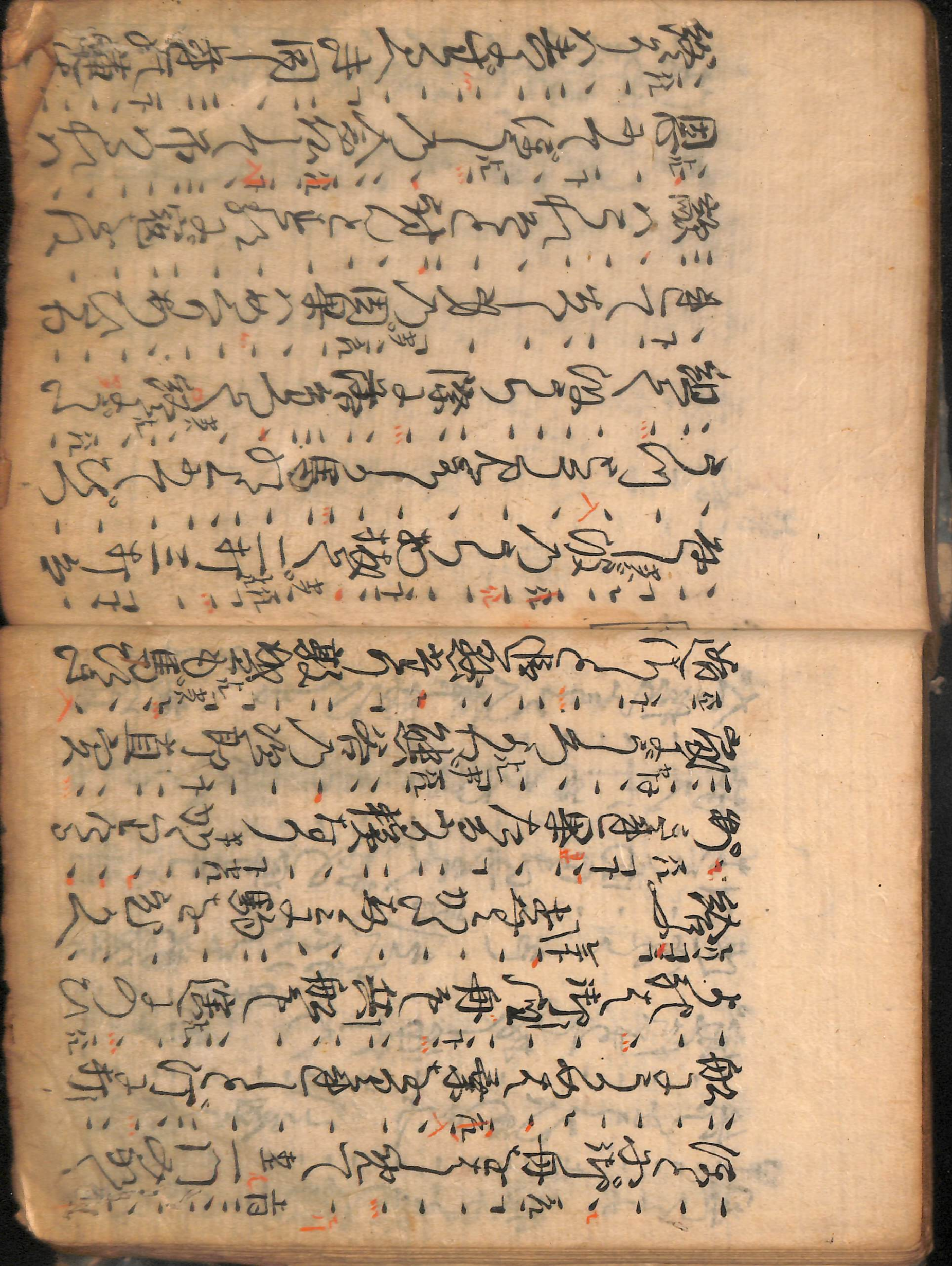
功力よ何の因果あつてそうゐん共
深き罪をもらひうゐめ　別ハ秋ハ乃
得脫乃縁　見そよ他ぜう乃功力なれハ
目ろうハかるいま　人うハよ　別ハ法の
数なりまつる　見くうや悪人乃らもを
撥もてく言人乃歌を指きとハ方の
事のうゐ猛や有うくしく迷惑ハ

ハ方ハ
ちゝ共乃花共樹頭よのりるハ
根の機をもくめ秋乃月共水鏡う
聞へ下化衆生ハ
ちゝ共よ一門をもうへ
ゆう弱ハ撞ひ別よ撞花一日共学ハ
花ハ



を我袖も濡るゝ赤坂延宝の
苦屋よりもねて次ぐ人よのこを聖
松乃宮やゝ煙はまとゝよ初物嘉く
思ひを面乃山里ぐ紅葉の住居
して次ぐ人よ成るの一門云ふてそ
ぎつき仏を長更夜六月初物
成ふハ親ゝ紅葉我らを集め

今揚ふ筆遊ひ
初ハ其
初乃御ふ
ちを面白ふ乃詩の寄手の陣
返ふ
弘ちを敷密の
嘉後まて物笛竹乃
命をうひ
早ふ



法師歌ていなりまゐ跡ぶく
ゆうひ給へ[illegible]ひてたひ給へ

第[illegible]　開寺小町　曲出一指子九位口傳居

侍えて入うう秋よあつ〳〵星の夢を
急う夢　時間　星を江の開寺の住僧
みちくゆきふい七月七日みてん狂よ
織女の夢どうをあひんぞ池
山陰よ花女の序を出ひて作か
子道と極めたるようやい住[illegible]

だいまの兄人道を伴ひ下ゞ従者の輩
和語にも所うらやとなひ
さうく
きる宮人と裏賢と一時よまたる
初秋の七日のゆふべよりやなり
きよ織女の手向て忘竹呂律の
多きよ　ちりを重ねて　変鳴雲
上講
二人道をひろ忘へてゞ織や錦の
きりしきれもうへて秋の家の
むとかるまりしれ所色もおりの
ゞ手向かまよ夕へうれく
一鉢をえらきたる味まあらの
夕ろうへとかりれもいろよ
使ひ花を変ろうつく紅井
まちよひろ柳の所よ

[illegible]
緑やうなるくたまろぐ〳〵愛よ言ふこのもの
[illegible]
終よい者の爲乃ぐ〳〵ぬ[illegible]れ[illegible]
[illegible]
去むりよ歸る秋ものぐ[illegible]
[illegible]
悪しやく　うりよ者よ中へき
[illegible]
よりんぐ見い法蘭寺よ住者ってい法
寺の児達ものを法檢古ってい者よ
乃法りよりとよまるぐ子とを讀へき様
もりとひやぐよりも語りも聞ったよ
見ものも見へむってい　もい見りも
りの事を聞わ理よ乃人去わ
よとりり花薄ほよ出ひへきりも
りひぐと拾りて言葉の花葉者よ
り面ぐりの真ものとひりんやり
見もたりの人乃心よりすの所わ

（ハル）それ難波津の哥ハ人の教ひとなる稽古の
手をならふ手習ふ人のはじめにもまづかき
よしやしのよすよ　（上）是等ハ昔代より
さまれ文字の数ゝにまなひして
ことのはのいろ／＼にうつりかはる人のこと
かくめでたかりけるをうつしても讀ならひ
詠哥なれはこそ稽古の道の哥をも習ひ

（ハル）あさか山乃哥ハ大君の御こゝろを
やはらげ故に見えてたゞ詠すよ
なり　（上）このうへ心をやすむる此ふたうたを
父母として　（中ハル）手習ふ人のはじめにて
（上ハ）高き賤き人ともわかち　（中上）都鄙を
國乃ひなびや　（上ハ中）都ことばのうつり
遠近も　（中下）まなびける心に　（上）あまたのうへ

上三

けしやきぬの音いつくろひけ
よみすとの望いもつきず青柳の糸
絶ぬ松の葉のちりうせぬ種とし心なき
思ひを述べひまうつりかた乃
音乃声をあらはしうそのあともつきせ
じや〳〵 万歳なんずる言葉人
言葉多しとて其母乃音や妻ハ此

絃母のこゑのためしすくなからん
秋きてかくへきなひありけりかる乃
蜘乃かるまひ思ひまさしも嘉ハ女の
吾山ハ 星ちいさし衣通姫のなよせ
衣通姫といふハきさ天皇乃后なるく
ましまし形乃ことく秘むも世流と社
筆のひくハ衣通姫乃流をとま

きひ給ふやゞ[illegible]年間したがおか野の
小町うゝ衣通姫の流といふまぎれ
なきハなとうゝの事の根を絶て
ぢうゝ水あらハ[illegible]いあんとうゝ[illegible]
小町の事人おもしろい大江の[illegible]
心がけうきゝ[illegible]
文屋の康秀あり三河守よりあるし
時田舎めく心もとなく歌ゆゑと申さ
さうびく[illegible]
年を経ぬ[illegible]
まゝ思つゞ[illegible]
俺ぬきゝの事[illegible]
ゞ衣通姫の流と[illegible]
ゞ年月とう[illegible]

の身とし人は殊小町のなかりか志ばしまこの
泣世々よう人きあれば今日歌合可あり
御身は小町乃果こよぎのこおもつこ
絵にかくとよ いや小町とはうつや
紫乃んをでと社よう志ぬをうつる物
あら其のつき人の心乃花やさかゆるらんや
偽のきしは所ぞうき草乃根をたえて

ざそふ水あらば今はいなんとぞ思ふ
ちらりや 雲やつれ秋は老たまらぬ
志らむは人とまぬめ乃涙の雨かこ
野の末も思ふ草乃花志ほまきたる
身のさて近行志る露の名残かし
思ひつくぬ世をや人の心乃川流とぞ
しるもの今さら身乃上をかこつ節

月もさえゆきて幾秋の露霜
うつろふ草の塚家し虫の音もかれかれ
生命既にかぎりとあつて槿花一日
の栄にならし夕あれはかなくあさまし
ねかはくは世中に気いつきの思数の心
如詠きし事も秋なるにかはらて
吾より花散し惜ても猶あまるは

露の命はかなきこそ哀れ音や思ひの
いとふ人の身や思ひし時はたよもまるよ
古事によ修行方の責てのみようて
めの若うひし氣色いみへさと
旅と申し宿もさたいまんとかいちよ
かきよの金ちりをうきとよ小水精とつね
寧興属車のお哀乃答とかいちう

て數妙の花つゝ[illegible]
花の錦の玉とねのたきつゝ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一元一一一

法の如くなる妙法一座宣しらく
導師高座よりうり發願のはらは
ずづと敬白一代教主釋迦牟尼
寶号ご三世の諸佛十方の薩埵
やてまうらく塔婆なる敬白忌經や
是を讀誦を法ありをしう
うつもきい独うてい急ていい讀誦
文をうり読んへ敬白うらを讃誦の
ゆご三寶衆僧の布施一裏びき
ろろさ家ハご二親の頂證仏果
為ゆの代衣一宮ご三寶よ供養
ミミミミミミミミミミミミミミ
ゆ彼西天の貧女ご衣を僧よ供
ぎいゆの後世の手縁べうの貧
一一一一一一一一一一一一一一
女を親のため上信ゆの代衣れめきく

やまひう　やうあるを　屋うか
あらはしきてゆを　仕事うてゆう
はらんに兵へう　洞通とあまりかたを
なを宮へまうんて　追うて行作
弱よやうまきとへへやうかをと
へ弱よやまてん　意曲もやへ
始うはあやう有まこみてゆこと
洞通とあまんうもいは小独尚ゆ
代意とういてゆうどと不審ようと
かが居士うは言へへうば者へ親孝追
善の為に我身を洗小独ようて洞通
よあまたうと思ひざあらはへへ人の
者へうと商へうてうしかきへ道祝
ごあいひうとあらんに弱ぶ孝あら

たちまちに滅び
東国の人民大津松の
きゆうをもうすあたり
出でぬかくのごとく居士洪誓を
持ち行ひ替てつねにかつよ
ものをいやそれ人間の法
殺法の業に成へしいやく殺生百

日の日蓮をあしてもぜ善悪の二を示す
為ゆえに人間の善人悪人
善悪の二道変よ極つらいをいう
ぜんの殺法は是なり殺法功徳善
及於一切衆生興宗生成佛道
修行のためあれを北上
だとくへし北上

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

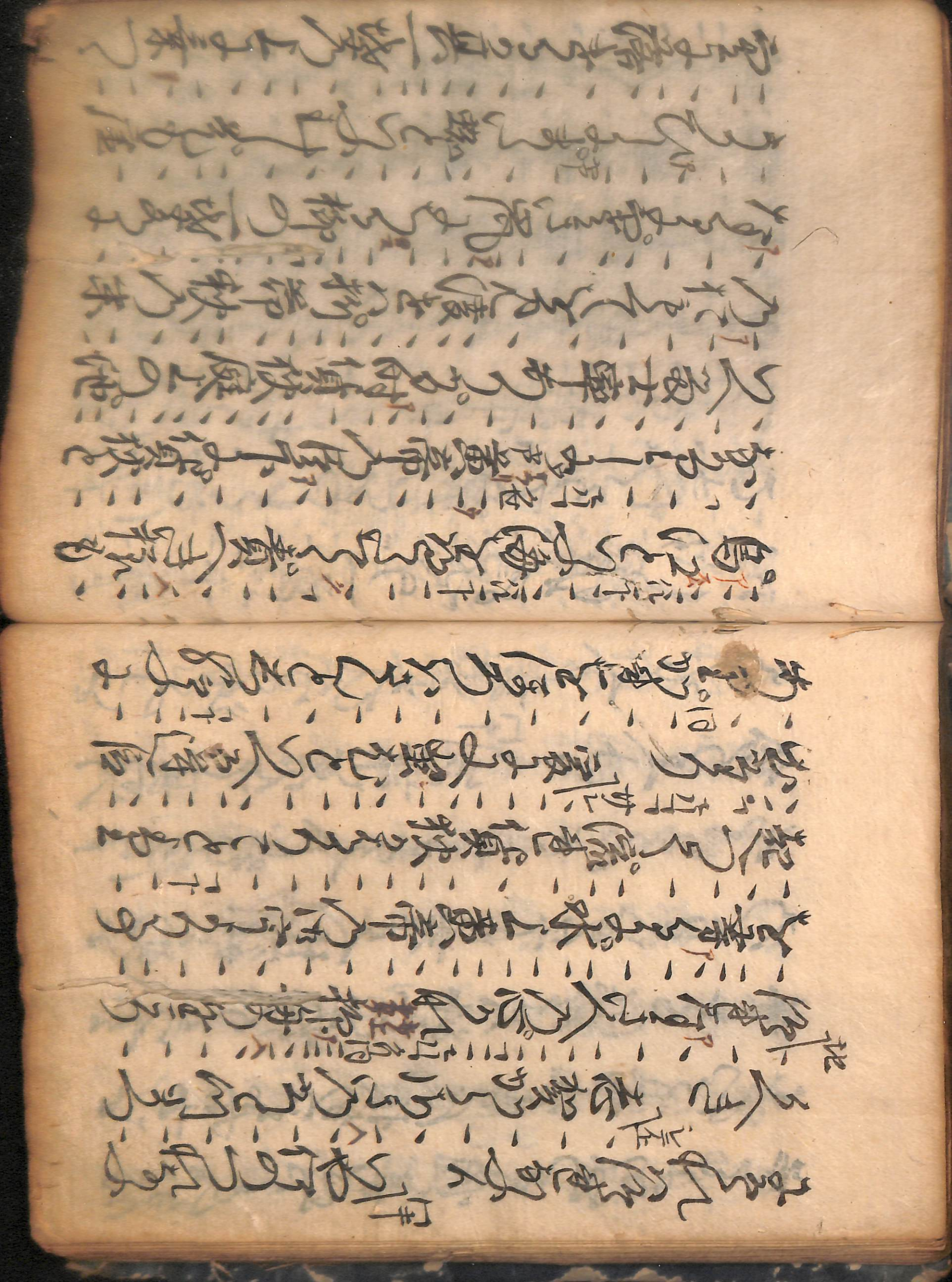
者は行逢ひたるまゝにて
庵室へ帰るべき法なく
法をも破りやまんず
とも破られんまじ
つまらぬ奥山の国へいらるゝぞ
ものとおもうまじい
なくは拷問といふ
拷問とは
拷問行
命をとらうず
いのちを
ぶらぶらつとおりまいい
命をとらるゝ
中うらみ
いや洗身
ありてはよかるまじ
みてはいらぬ
見ぬふりをして

[illegible]

[illegible]

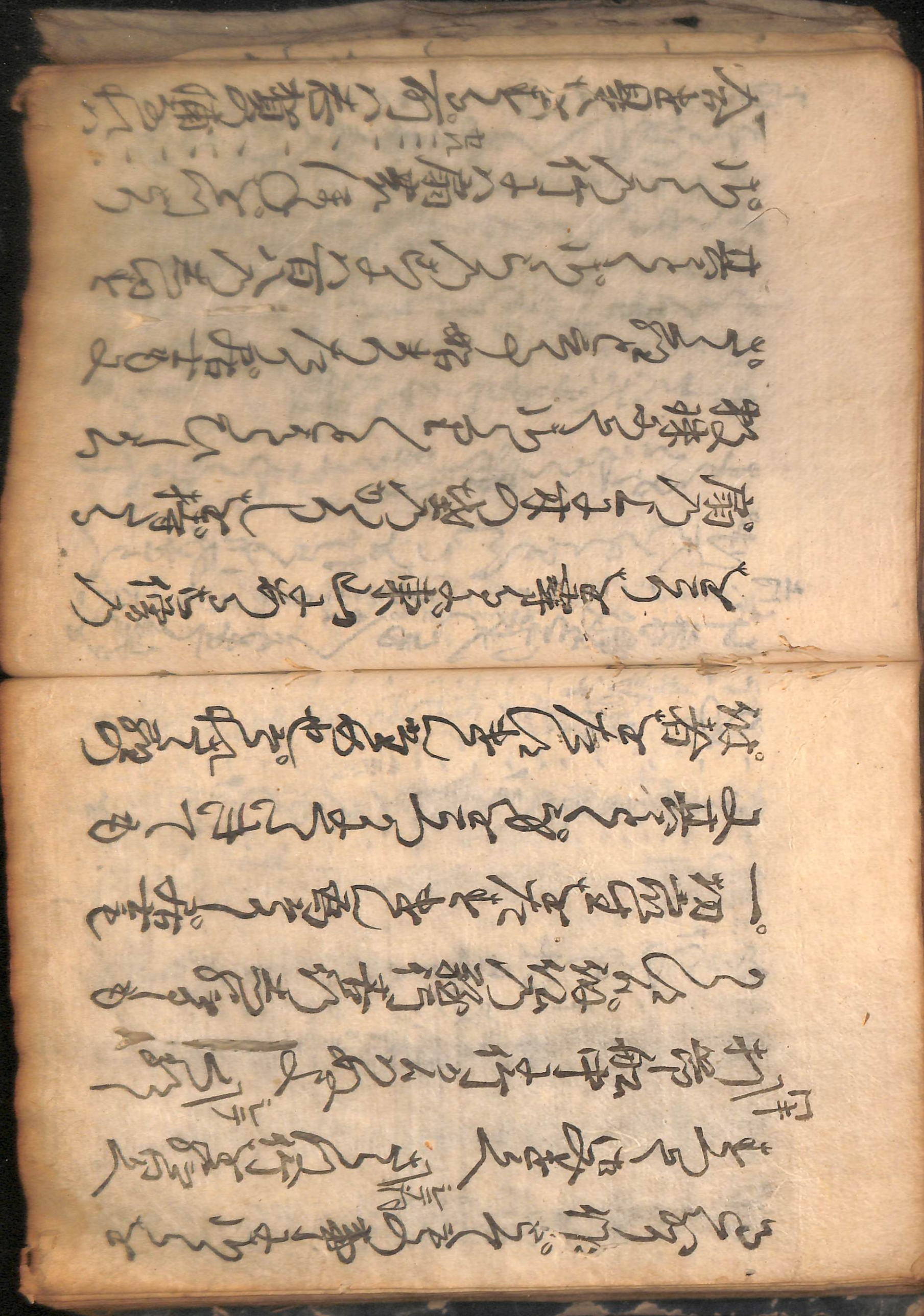
[illegible]

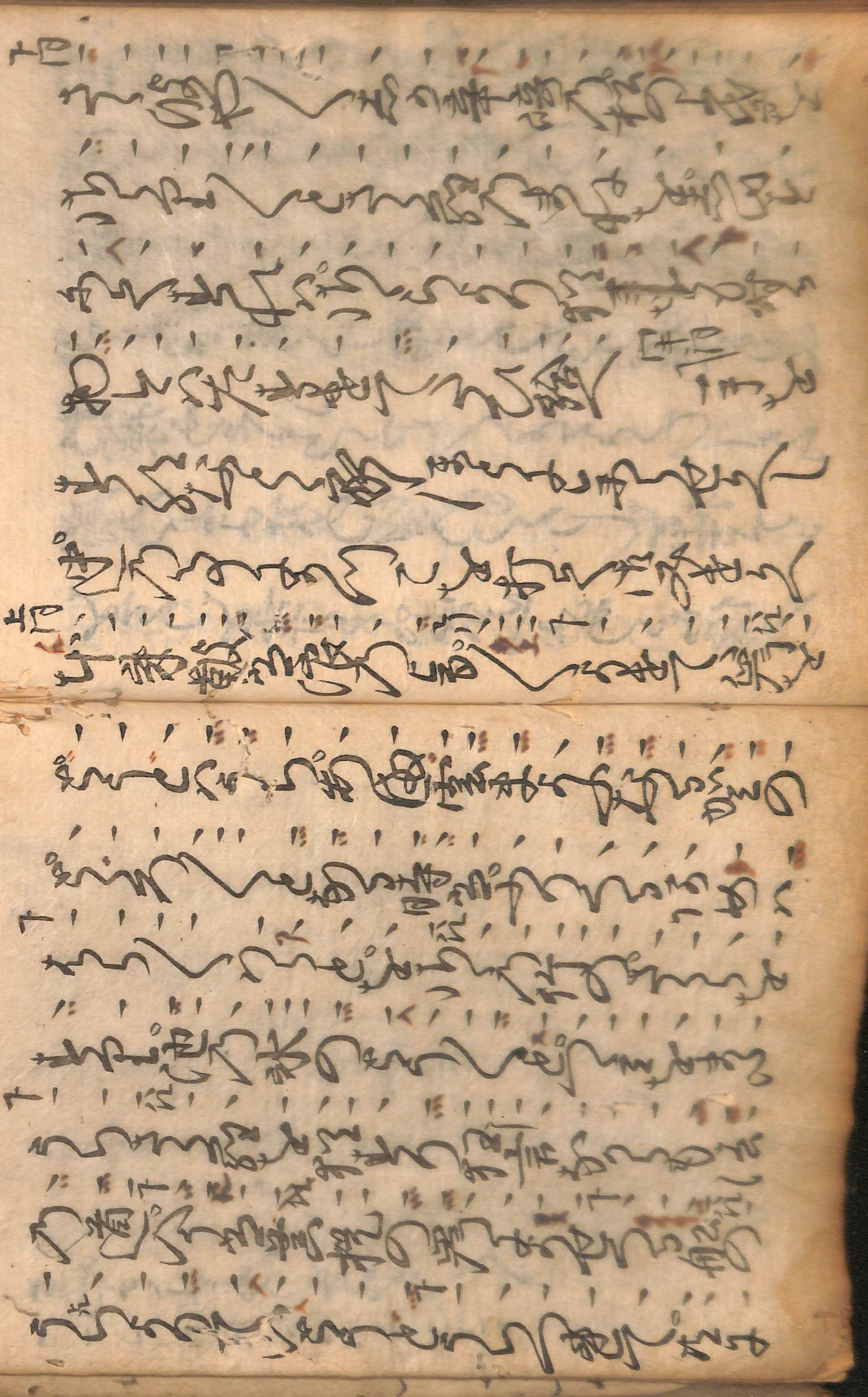
されん事を願て貝塚なる八葉寺へ
事なくして
一年とうとく説法宣伝
いて聽衆の耳を驚かす高座
よりく一切出家の奥迄も
其中に法華経へ
それは狂言綺語なれども
るもとく法華経をひらく法華
給うとくまう
法華経を見て
ちきはらんも
乃至一念
業を捨よ
わるもの
をそこ

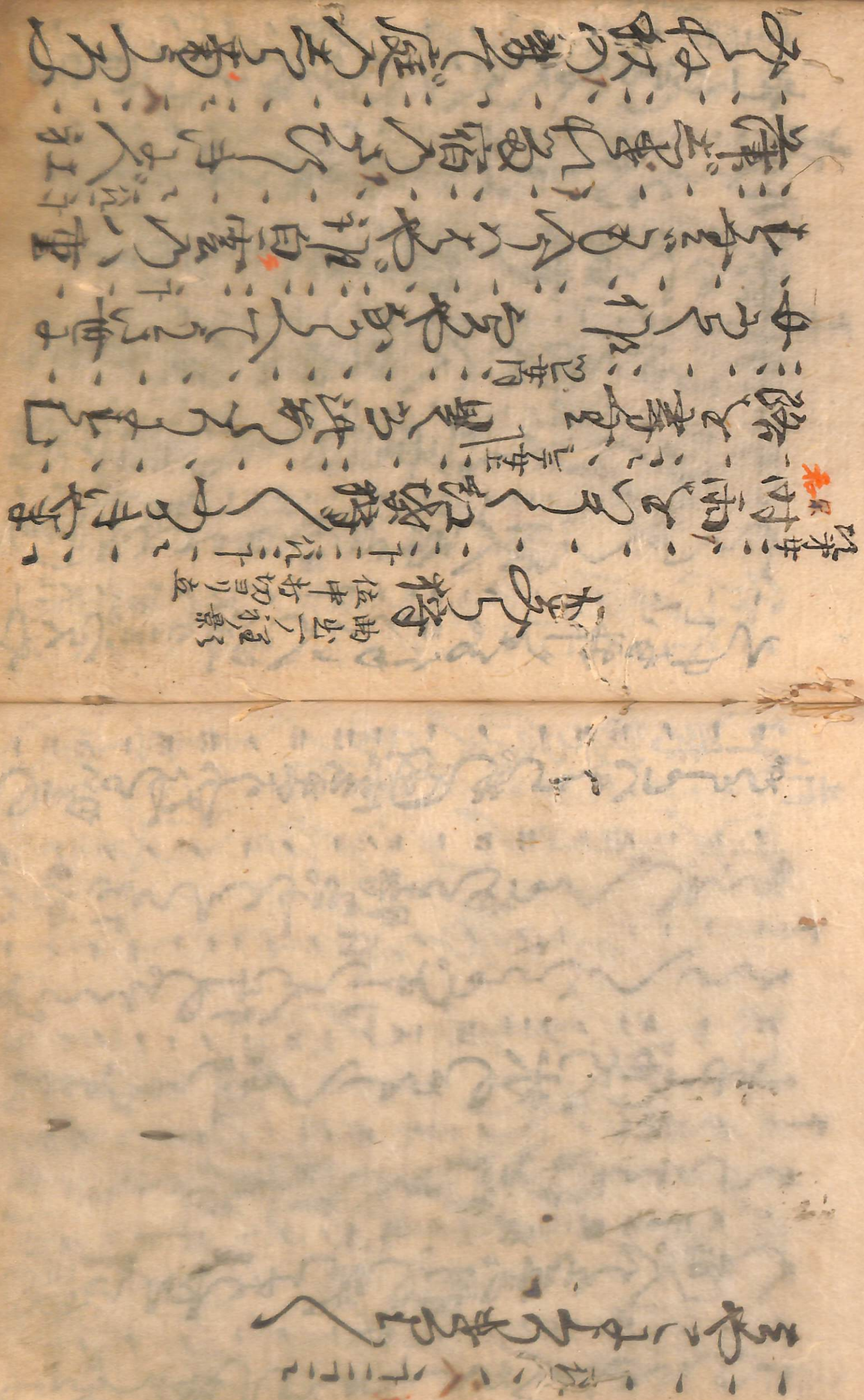


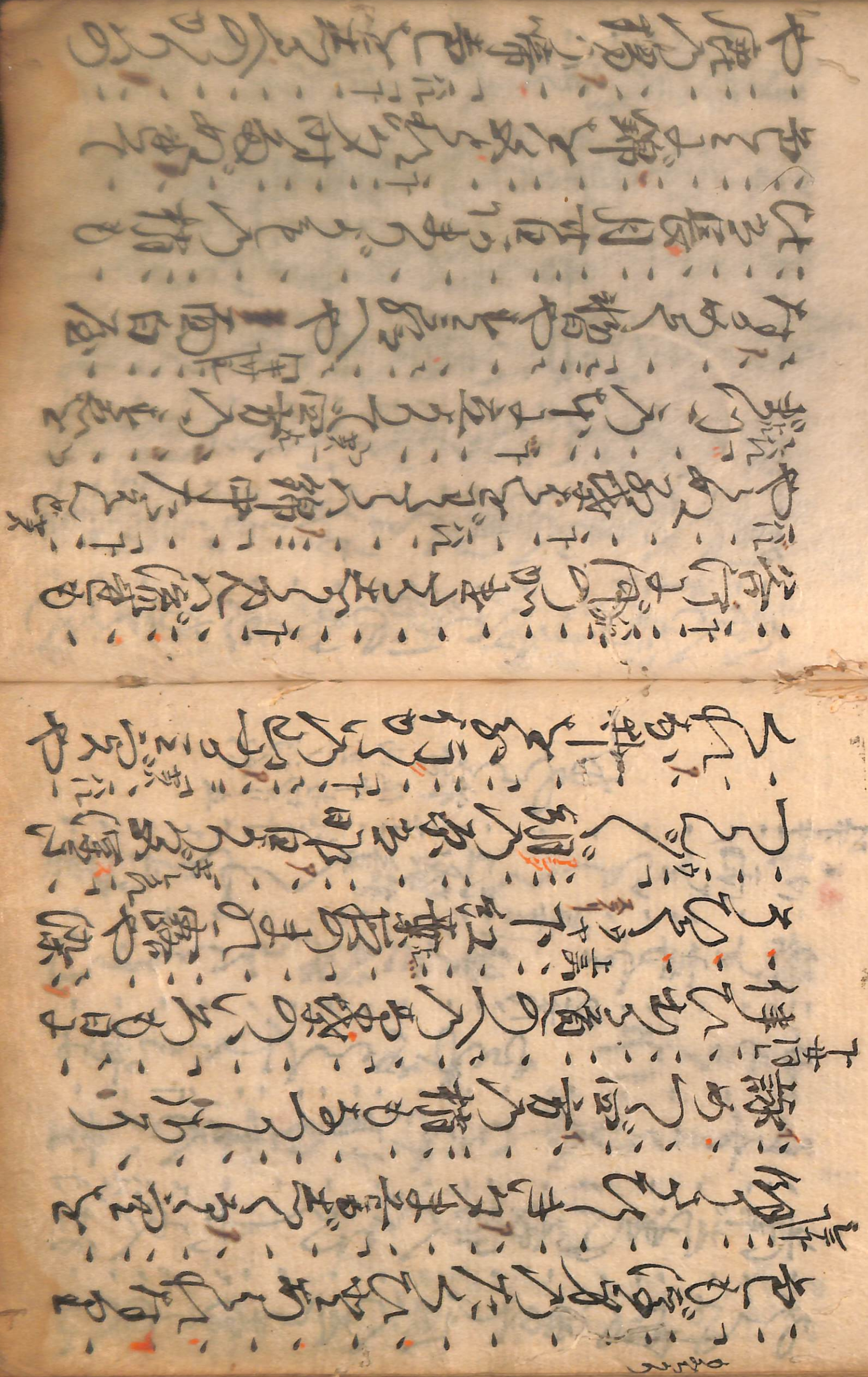
次第くるしかりけるに、
柳の蔭に涼しき風吹きたりけ
るに、秋霧のたちこめたりけ
れば、
宮もと思ひうめきたりて起き
つるに、黄帝見給ひて、鳥ども
をきわたりて出でをやとて、
ぬやはらぎ給ひ、一萬八千歳と
なりぬ。

上皇、船の中にて、
うや、
船きは船のきしの字を書き
ものと云ふ。
龍顔とぞ付けたりける。
君の御座船と龍顔鷁船と
御代ごとに
鷁の毎と龍頭鷁毎と







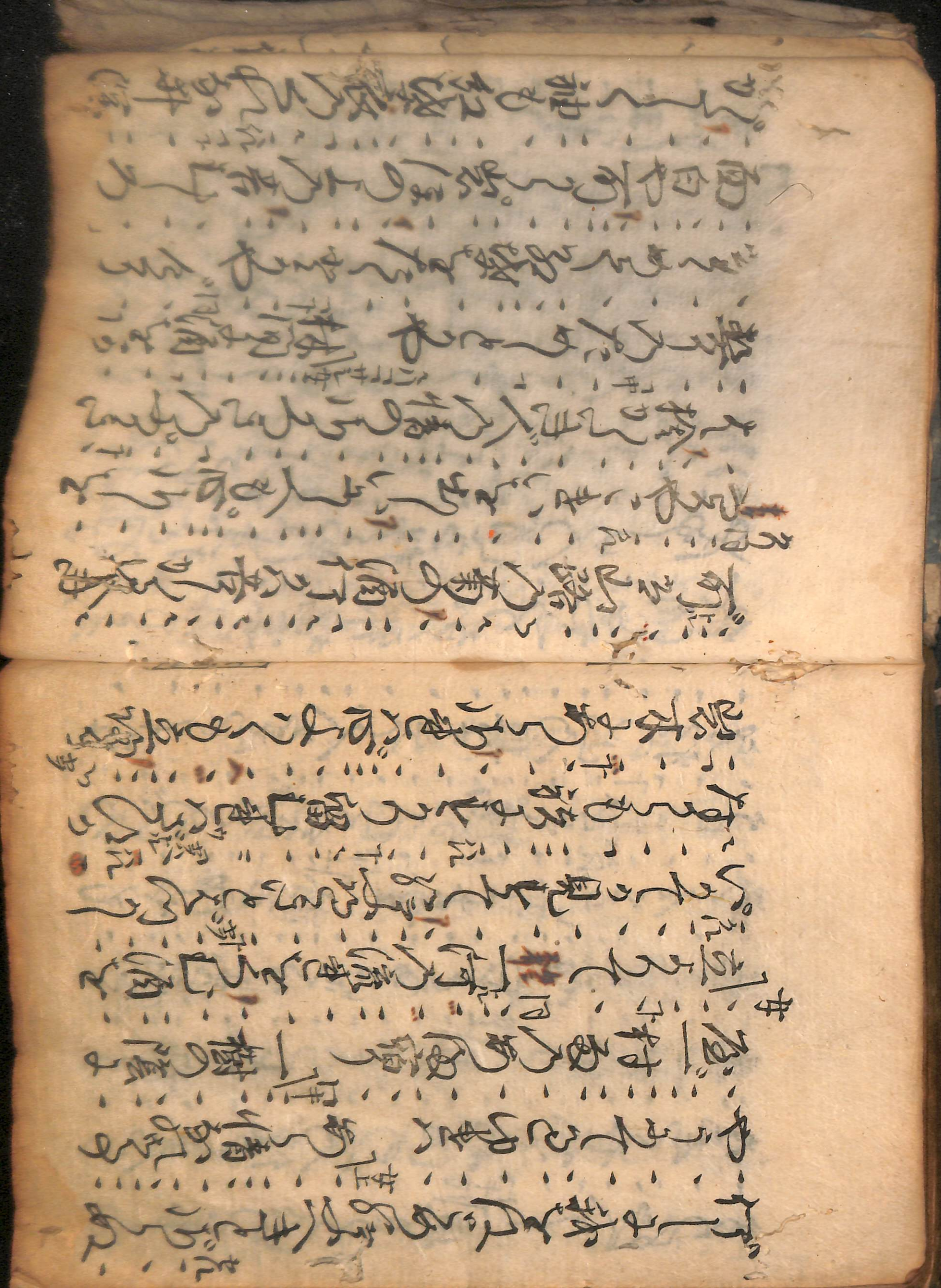


[illegible]

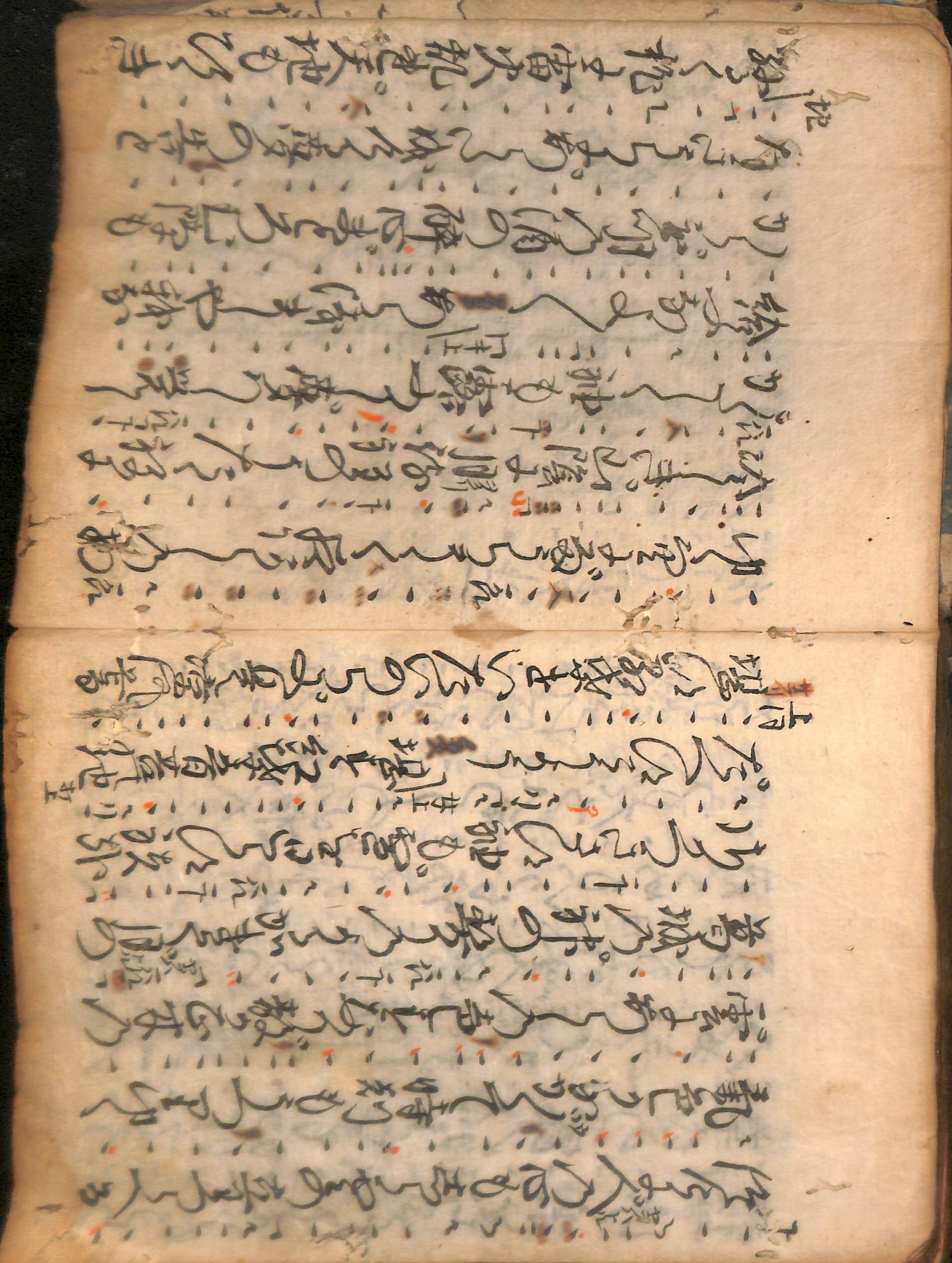
[illegible]

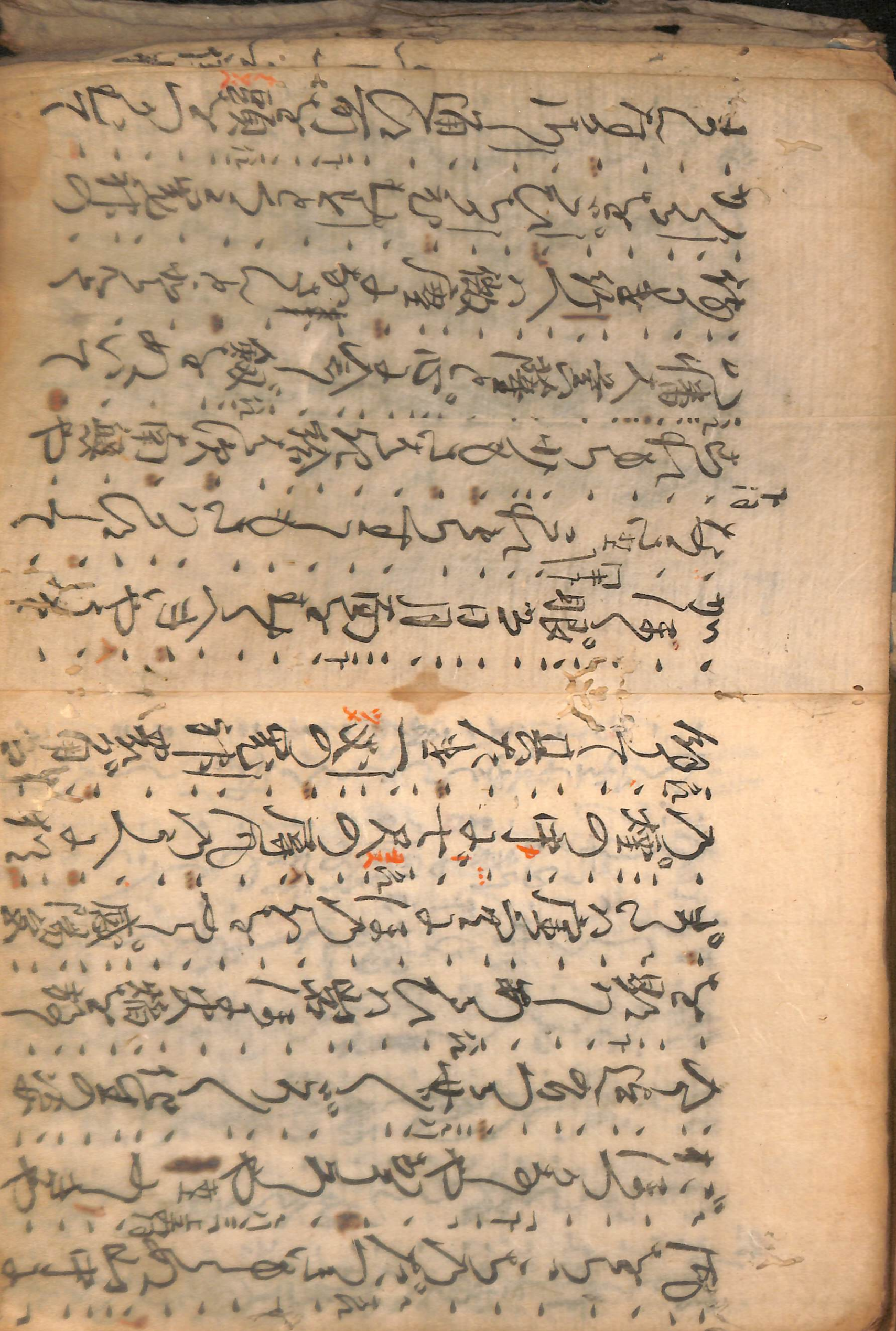
[illegible]

[キ]
[illegible]
思ひもよらぬ事なれども
上箱の道の奥の紅葉狩酒
宴の[illegible]なるべかりし
まゝと馬ようして皆ともなひ
道に隔て山陰の岩かきとる
ぶつひう類なるべし
[illegible]
[illegible]
[illegible]



きかほのまゝ　世の人々思ひまと
ひ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
腸うちくく計なりしかさめたよ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
人ごろもかるくかゝれ行の袋づの
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
さりたるようきとは思ふ　いかも
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゆくさきを尚へたかつる心ばせ　伝も
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
尚めの道を　撰ぶまゝ　と　酔よ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
飲酒をやめかへ　邪婬妄語もろ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ともよ　花ちるかゝる　染ハまの
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
世のもだちひ　の　桜　今可哀
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ちらめもいかに　説　世人ハ見
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
らてもあ世の　樹　ぬ　情
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
の色みてかなしも　行　道の人の
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
草堂の露のかゝとともかけてう
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
頼ゆく末をたゝれら
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ





[illegible]
つきよ忘れていとほのぐらるを引
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

國學院大學
第1920號
昭36 3.14

右百番者観世左近太夫當流
以章句本寫之ヲ秘密相承伝
尚加吟味改正文字板行者也
延寶八年庚申仲夏吉辰
寺町通醒顔寺前
安田十兵衛板本